

朝を
ひらく

ある酒屋さんでのごこと。お店のご主人が夜になると「ああ、死にたい、死にたい」と漏らす。奥さんが困り顔で、「私は一体どう答えたらいいがけ」と、私に尋ねられる。さて、どう答えよう。

これを「あべこべの心理学」で考えてみた。「死にたい」の逆は「生きたい」。このご主人は「生きたい」のである。でもどうやって生きたらいいのか、「頼むから教えてくれよー」との叫びが「ああ、死にたい」という、あべこべのコトバに置き換えられている、と解釈する。

あべこべ

ヤンキー系の高校生がワイドショーをみて、「先生、人を殺して何が悪いんや」と突っかかる。あべこべの心理学では、これを「先生、人の命の尊さを教えてくれよー」との叫びと読み解く。

この世とあの世は「あべこべ」。え、そんなバカな。でも、どうもそのようなのだ。

梅原猛氏の著書などによると、

永田 円了
真国寺住職



日本の習慣では、人が亡くなると、着物はこの世とはあべこべの左前に着せる。死者の枕元の屏風は逆さに置く。この世の夕べは、あの世の朝。夜の初めのお通夜は、あの世では朝の始まり。あの世に送り出すには、あの世が明るく朝でなければならないのである。

また、この世の死者は、あの世の生者。葬式では死を悼んで涙を流す。でもあの世では、「お帰りなさい、無事に帰れたね」と笑顔で迎えられる。命の誕生は、この世では大きな喜び。でもあの世では「この子はこの世で使命をちゃんと果たせるだろうか」と、不安

な声に見送られるという。

「公然の敵のほうが、偽りの友よりよっぽどいい」という台詞
「An open enemy is better than a false friend.」(「エークスピア十二夜」)。なるほどそうか、相手に良く思われたいが故にすり寄ってくる友より、歯にきぬ着せず辛辣な批評をしてくれる御仁のほうがよっぽどいいとは、うーん、納得。

アマノジャクを自認する者にとって、このように物事をあべこべに考えることは、なんとも愉快である。まるで頭の中の既成概念が壊れてしまいうようなこと、でもそれがいいのである。

頭の隅っこで凝り固まった「思い込み」は人間成長にとっては「見えざる敵」だ。これを破壊し、思考に自由を与えるには、あべこべの心理学が威力を発揮する。

既成概念壊す面白さ